

三つ紐伐り（台切り・三つぎり）の由来に思うこと

資料館スタッフ 中畑孝史

1. はじめに

三つ紐伐りは、木曾・裏木曾地方において古来より伝承された巨木を伐倒するための技法で、幹の三方向から斧を入れて立木を倒した。この技法は明治後期から昭和初期の間は、台切り・三つぎり・三つに切ると呼称されていたが、現在は広く、三つ紐伐りの名称で認識されている。

チェーンソー伐倒が主流の現代においても、特別な場面で三つ紐伐りが使われ、木曾式伐木運材図絵に三つ紐伐りが描かれているなど、この技法に関心が集まることから、その名称が三つ紐伐りに定着するまでの過程を考察した。

2. 三つ紐伐り

三つ紐伐りは、幹の三方向から斧を入れ三つの穴を穿ち、鼎状に弦と^{かなえ}と呼ばれる三脚を残して、最後に伐倒方向と反対側の弦（追弦）を切つて巨木を倒す技法で、20年毎に行われる神宮式年遷宮の御神木は、御杣始祭の際にこの技法で伐倒される。

三つ紐伐りの基本は、道具に斧のみを使用して三つの穴を穿つが、三つ紐伐りに類似する伐倒方法に鼻緒伐り・改良三つ紐伐りがあることから、それぞれの伐倒方法を検証する（図1）。

(1) 三つ紐伐りの伐倒方法

- ①斧で受口を穿つ。
- ②斧で二つの追口を穿つ。
- ③追弦を斧で切り離し伐倒する。

(2) 鼻緒伐りの伐倒方法

- ①斧で受口を穿つ。
- ②ボルト錐（別名ギムネ・鋸錐、^{もじぎり}先が^{らせん}螺旋状をし、丁字形の柄をまわしながら穴をあける錐）で穴を開け貫通する。
- ③錐穴に細い鋸を入れ、伐木用鋸の幅まで挽き進める。
- ④伐木用鋸に交換して、受口の深さまで挽き進める。
- ⑤追弦を斧又は鋸で切り離し伐倒する。

(3) 改良三つ紐伐りの伐倒方法

- ①斧で受口を穿つ。
- ②斧で受口の反対側に、穴を穿ち貫通する。
- ③斧穴に伐木用鋸を入れて、受口の深さまで挽き進める。
- ④追弦を斧又は鋸で切り離し伐倒する。



図1 伐倒方法の図

鼻緒伐り・改良三ツ紐伐りは、鋸を使用することから斧のみを使用する三ツ紐伐りの定義から外れた方法になる。インターネットホームページの「林業の安全作業情報・伐倒技術の変遷」では、三ツ紐切り・鼻緒伐り・改良三ツ紐切り等の伐倒方法の図解が公開されている。

3. 年代における名称の変遷

斧による伐木が主流だった頃の明治40年(1907)から昭和16年(1941)の間に発行された文献は、「台切り・三つぎり・三つに切る」と呼称していたが、斧伐が衰退した戦後に発行された文献等では、「^{かなえ}鼎伐り・三つ目切り・三方伐り・三つ口伐り・^{みつる}三弦伐り・三ツ紐伐り・三つ^お緒伐り・鼻緒伐り」と呼称されている(表1)。また、改良三ツ紐伐りと区分するための名称の「本三つ伐り」もある。これらの名称は、伐根の形状(台切り・^{かなえ}鼎伐り)・三つの穴(三つぎり・三ツ口伐り等)・三つの弦(^{みつる}三弦伐り・三ツ紐伐り、三つ^お緒伐り)にそれぞれ由来すると考える。

昭和26年(1951)の長野営林局伐木造材作業心得(『伐木運材経営法』より)に改良三ツ紐伐りが登場し、昭和63年(1988)の坂巻俊彦著『残したい三ツ紐伐り』の発行以降に、長野県内(旧長野営林局管内)は、三ツ紐伐りの名称が定着した。なお、岐阜県内(旧名古屋営林局管内)では、主に三つ緒伐りの名称が使われている。

戦前の文献における伐倒方法の解説では、大正11年(1922)発行の高知大林区署『行啓記念写真帖』の伐木状況写真に、次のような説明が付されている。

高知県長岡郡吉野村大字七戸龍王山国有林29林班の斫伐地に於ける、櫟の伐木、三ツ紐伐りの状況なり

昭和7年(1932)に初版発行の本多農林教科書『森林利用学』の記述である。

木曾地方では古来斧のみを用いて伐採する風習が行われて居た。其の方法は普通頭巾切で特に直径の大きなものは台切と言ひ、樹幹の三方から斧で刻口を付けて追弦と称する三脚で樹幹を支え、追口の側の追弦を徐々に伐って予定の方向に樹幹を倒す方法が行なわれた。高知方面で行われる三つ目切り或いは鼻緒切り等と称するものも之と似た方法である。

昭和8年(1933)発行の『和英独仏林業辞典』では、各伐木方法を解説している。なお【利】は森林利用、《方》は方言、()は調査された箇所、{}は同意語を表す。

ダイキリ〔台切〕【利】従来木曾地方に行われた切断法の一種にして、直径の大きなものに、受口に対し二方より追口を設け、追弦を三脚状に残し、受口の反対側の追弦を徐々に切断して伐倒する方法《方》〔台伐〕
ミツヒモギリ《方》一名「三方伐り」とも言う。即ち櫟の如き有用樹の伐採に当たり斧のみにて三方より切り込み伐採する方法(熊本県球磨郡)

ミツメギリ〔三目切り〕【利】土佐地方に行われる切断法の一つにして台切と似たるもの、追弦を下駄の鼻緒状の位置に残すことにより鼻緒切りとも言う。
{鼻緒切り}

昭和16年(1941)発行の『伐木運材図説』における伐倒方法の記述であり、この方法に地域名は付されていないが、木曾地方であると考えられる。

貴重な材或いは特に大きい材は追口を二つ付ける。これを「三つきり」という。この場合には、支柱は三本となる。受口の正反対側のものが追弦で、他の二柱を横弦という。追弦を徐々に切れば横弦は自然に折れて所要の方向に幹は倒れる。

以上のように各地方で樗を伐倒するための三つ紐伐りが存在し、昭和16年(1941)頃までは、木曾地方の台切・三つきりと区別されていた。なお、前述の文献等に、^{かなえ}鼎伐り・^{みつる}三つ口伐り・^お三弦伐り・^お三つ緒伐りの記述は見つからなかった。

昭和19年(1944)発行の『伐木運材教程』に、樹幹の大なる木に応用(木曾地方)の「^{ミツヒモキリ}三弦伐(台伐)」と記述されていた。そして、昭和22年検定発行の教科書『林業生産2』における台伐の解説で「弦あるいはひも(紐)とよばれる三脚」としていたことから、各地の類似した技法の名称が混在し、及びこの^{ミツヒモキリ}三弦伐とひも(紐)の記述がその後の三つ紐伐りの定着に影響を与えたと考えられる。

^{かなえ}鼎伐りは、^{かなえ}鼎状に切ることがそのまま名称となり、^{みつる}三弦伐りは、^{ミツヒモキリ}三弦伐の読み方が変化したと推測する。三つ緒伐りの緒は、楽器や弓に張る糸(弦)の意味も有することから、三弦伐・三つ紐伐りが三つ緒伐りに変化したと推測するが、この二つの名称で長野県・岐阜県に分かれて定着した理由は解明できていない。

三方伐りが熊本県の方言とすれば、三つ紐伐りの別称とするのは適切でないと考えられる。

4. おわりに

昭和19年(1944)発行の『伐木運材教程』の^{ミツヒモキリ}三弦伐が現在の三つ紐伐り・三つ緒伐りの発端となったと推測している。『伐木運材教程』にそれまでの台切に変わって^{ミツヒモキリ}三弦伐が記述されたこと及びその出典は不明であるが、他地方の三つ紐伐りとその記述した教科書が現在の三つ紐伐りの名称に大きく影響したと推測する。

三つ紐伐りの別称を多数確認しているが、その中で三つ紐伐りと混同して使用されている名称の鼻緒切り・三目切り・三方伐りに注意しなければならない。また、未だ知られていない名称が存在しているのではないだろうか。

現在は三つ紐伐りの名称が広く認識されているが、木曾地方の伐倒方法と他地方の伐倒方法が区別されていたことから、斧伐の頃に木曾で使われていた台切り・三つぎりの名称を意識してほしいと思う。

表1 三つ紐伐り関連の資料名称

| 発行年(西暦) | 資料名称 | 著者等 | 木曾の三つ紐伐りの名称 | 備考 |
|-------------|--|---------------------------|---|---|
| 明治40年(1907) | 信濃山林誌 | 信濃山林会 | 台切り・三つに切る | 三方より穴を穿ち、筋状に三脚を残す。伐倒すべき方向にある口を要口と云い、他を脇口と云い、三脚を脇道と云う。 |
| 大正2年(1913) | 木曾の林業 | 不明 | 台切り・三つに切る | |
| 大正4年(1915) | 木曾山 | 徳川義徳 | 台切り・三つに切る | |
| 大正5年(1916) | 木曾御料林之造材運材 | 帝室林野管理局 | 三つぎり | |
| 大正9年(1920) | 木曾御料林提要 | 元帝室林野管理局 木曾支局長内藤善助(講述) | 台切り・三つに切る | |
| 昭和3年(1928) | 木曾式伐木運材法 | 帝室林野局 | 三ツギリ | |
| 昭和5年(1930) | 標準林学講義 | 園部一郎・三浦伊八郎 | 台切 | |
| 昭和7年(1932) | 森林利用学 | 本多静六原著、藤林誠改訂 | 台切 | 他に三つ目切り・鼻緒切り |
| 昭和8年(1933) | 和英独仏林業辞典 | 大日本山林会帝国森林会編 | 台切(台伐) | 他にミツヒモギリ・三方伐り、三目切り・鼻緒切り |
| 昭和13年(1938) | 林業講話 長野県木曾山林学校 | 帝室林野局 樋口徳一 | 台伐り(三つに切る) | |
| 昭和14年(1939) | 帝室林野局五十年史 | 帝室林野局 | 台切 | |
| 昭和16年(1941) | 伐木運材図説 | 關谷文彦 | 三つぎり | |
| 昭和19年(1944) | 伐木運材教程 | 高園久次郎 | 三弦伐(ミツヒモギリ)・台切り | 教科書 |
| 昭和22年(1947) | 林業生産2 | 戸田良吉、藤林誠 | 台伐・三つ伐・三つ目伐 | 教科書、弦あるいはほも(紐)とよばれる三脚 |
| 昭和26年(1951) | 伐木造材作業心得 | 長野営林局 | 三ツ紐伐り | 伐木運材経営法(昭和27年9月発行)、木曾ヒノキ胸高直径1尺8寸以上のものは改良三ツ紐切り又は鼻緒伐り |
| 昭和29年(1954) | 木曾式伐木運材図説 | 長野営林局作業課 | 三つぎり・鼻(かなえ)伐り | |
| 昭和31年(1956) | 改訂林業生産2 | 梅津勝義 | 台伐・三つ伐・三つ目伐 | 教科書、かなえ状(鼻状)にツルあるいはヒモとよばれる三本の鼻 |
| 昭和34年(1959) | 明治前日本林業技術発達史 | 日本学術振興会 | 三ツギリ | |
| 昭和37年(1962) | 木曾の山林をめぐる歴史 | 北沢啓司 | 三つぎり・鼻伐り | |
| 昭和45年(1970) | 伐木運材 | 加藤誠平ほか | 台切り・三つひも切り・三つ目切り | 教科書、弦(ひも)とよばれる三脚を残す |
| 昭和50年(1975) | 木曾式伐木運材図説 | 所三男監修・解説 | 三つ伐り・鼻伐り | |
| 昭和51年(1976) | 林業技術史第2巻地方林業編下 | 大友栄松ほか | 三つひもぎり・三つぎり・鼻伐り | |
| 昭和52年(1977) | 木曾式伐木運材図説 THE WOOD-CUTTING AND TRANSPORTING SYSTEM OF KISO-CITY | 所三男監修・解説 | 三つ伐り・鼻伐り | |
| 昭和60年(1985) | 信濃毎日新聞(御仙始祭記事) | 信濃毎日新聞社 | 三つ尾切り | 註: 緒と取り違えたと推測 |
| 昭和63年(1988) | 残したい三つ紐伐り | 坂巻俊彦 | 三ツ紐伐り・三ツ伐り・三ツ目伐り・台伐り・鼻伐り | |
| 平成元年(1989) | 山と木と日本人 森に生きる木曾人の暮らし | 市川健夫 | 鼻(かなえ)伐り | |
| 平成5年(1993) | 木曾 歴史と民俗を訪ねて 三訂版 | 木曾教育会郷土館部 | 三ツ尾切り | 註: 昭和60年御仙始祭記事の引用と推測 |
| 平成7年(1995) | 森と水と木曾谷 | 平田利夫 | 三方伐り・三ツ紐伐り(ミツヒモギリ) | |
| 平成9年(1997) | 木曾ひのき | 平田利夫ほか | 三紐伐り(鼻緒伐り) | |
| 平成11年(1999) | 木曾谷の歴史 | 平田利夫 | 三ツ紐伐り(ミツヒモギリ) | |
| 平成13年(2001) | 檜の森 | 林野弘済会 | 三紐伐(みつひもぎり) | |
| 平成16年(2004) | 玉滝村の森と自然 | 玉滝村 | 三紐伐(みつひもぎり) | |
| 平成17年(2005) | 御仙山と関係随祭・行事について | 神宮司庁(広報室) | 三ツ紐伐り | |
| 平成18年(2006) | 木曾谷の森林と人々とのつながり | 木曾谷流域林業活性化センター | 三ツ紐伐り・三ツ伐り・三ツ目伐り・台伐り・鼻伐り | |
| 平成18年(2006) | 木曾路大紀行 | 平田利夫ほか | 三紐伐り・三ツ伐り・鼻緒伐り | |
| 平成20年(2008) | 伐木を伝える技 | (財)竹中大工道具館 | 三ツ紐伐り(みつひもぎり)・三弦伐り(みつひもぎり)・三ツ伐り・台伐り・三ツ紐伐り・三ツ目伐り・三ツ口伐り | |
| 平成22年(2010) | 木曾 歴史と民俗を訪ねて 四訂版 | 木曾教育会郷土館部 | 三ツ紐伐り | |
| 平成24年(2012) | 森林の江戸学 | 徳川林政史研究所 | 三ツギリ | |

参考文献

加藤誠平(1952) 伐木運材経営法. 株式会社朝倉書店
 高知大林区署(1922) 行啓記念写真帖. 片山コロタイプ製版部
 坂巻俊彦(1988) 残したい三つ紐伐り(柚の技). 株式会社平河町工業社
 關谷文彦(1941) 伐木運材図説. 賢文館
 大日本山林会・帝国森林会編(1933) 和英独仏林業辞典. 大日本山林会・帝国森林会
 高園久次郎(1944) 伐木運材教程. 株式会社六興出版部
 戸田良吉・藤林誠(1947) 文部省検定済教科書 林業生産2. 実教出版株式会社
 本多静六原著・藤林誠改訂(1932) 本多農林教科書[森林利用学]. 三浦書店